


博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査） 中山 智香子 

学位申請者 遊 佐香子

論文名 現代共同体論の展開と芸術の変容
— “表象” から “エクスポジション” へ —

【審査結果】

本論文は、現代哲学における共同存在をめぐる思考の展開と、現代アートの主要な特徴との間に照応関係を見出し、その関係の必然を芸術の成立の根本に立ち戻ってあと付けるとともに、共同体論を新たな地平に導いたJ・L・ナンシー以降の論議の連鎖をたどってその意義を腑分けし、それがまさしく現代の代表的な芸術家たちの仕事の意義の解明にもなっていることを、Ch・ボルタンスキー、G・リヒター、A・キーフアーという代表的な三人の芸術家たちの作品の解説を通して明らかにしたものである。

現代芸術の大きな特徴は、それが従来の「表象」の観念を逸脱していることにあるが、その転機は「表象の不可能性」が哲学でも芸術でも問題にされた「アウシュヴィッツ以降」にあるとされる。一方、戦前にハイデガーによって開かれた共同体の存在論的解明は、戦後は反動的なものとして遠ざけられていたが、1980年代にJ・L・ナンシーによって新たに問い直され、人間の共同性とは個を包摂する全体への志向としてあるのではなく、個の成立以前の存在の複数性にこそ根拠をもつものだとして刷新された。G・アガンベンはそれを人間の「潜在性」に引き寄せ、現代の人間の基本様態をあらゆる同一化の属性をもたない「剥き出しの生」に見た。そこで共通して共同性の契機とみなされるのが「エグジスタンス」から一步踏み込んだ「エクスポジション」だったが、現代絵画は歴史的経験を潜りながら、作品のあり方そのものの変容を通して、まさにそれと表明されない現代の共同性の場を作り出す「エクスポジション」として作り出されている。本論文はそのことを、上記の三重の作業（表象論、共同体論、実作の研究）を通してたんねんに明らかにした。

テーマ設定からして領域横断的であり、哲学的思考と芸術表現とを分ちながら結びつけている隠れた稜線を描き出そうとするきわめて意欲的な試みで、その独創性と作品解釈の随所にみられる創見は高く評価される。また、現代アートの作品をよく渉猟しており、その読解に新たな視覚を開いたことも重要な貢献だと言える。

以上のことから、審査委員全員一致で、遊佐氏の本論文が博士号を授与するに十分な達成を示しているとの結論にいたった。

なお、本論文の審査委員会は、指導教員でフランス芸術思想の松浦寿夫教授、フランス文学・文化論の博多かおる教授、元指導教員でフランス現代思想の西谷修名誉教授、そして外部から美学・表象文化論およびイタリア現代思想に詳しい岡田温司京都大学教授を招き、社会思想史の中山智香子を主査として構成され、査読、事前打ち合わせを経て、2014年10月31日に最終口頭試験を行った。

【論文概要】

論文は序と結論に挟まれた3章構成からなっている。構成は以下の通りである（節以下の区分は省略）。

序

第1章 表象からエクスポジションへ

第1節 表象の位置と役割

第2節 表象のモダニティ

第3節 現代の表象——表象からエクスポジションへ

第2章 共同性のエクスポジション

第1節 「顔」の集会的呈示

第2節 現代共同体論の展開

第3節 イメージに現れる共同性

第4節 現代アートに現れる共同性

第5節 芸術作品のエクスポジション

第3章 現代アートと共同性

第1節 クリスチャン・ボルタンスキー

第2節 ゲルハルト・リヒター

第3節 アンゼラム・キーファー

結論

図版

参考文献

序章は本論の趣旨と課題の呈示、そして構成の説明からなる。

第1章では、古典古代の芸術がイマージ（肖像）に始まり、とりわけ高貴な死者の表象として掲げられ、それ自体ある共同体を想定するとともに権力の磁場を形成するものであったことが示される。近代に入るとともに絵画には、初めは富をもつ者たちが、そしてやがて無名の民衆が登場するようになるが、それは彼らが政治的な場に登場したこととも呼応しており、フランス革命において絵画と政治空間との関係は決定的になる。まずはダビッドのナポレオンの戴冠式で、ついで自由の女神に仮託されたドラクロアの作品、さらには飢える民衆を登場させるジェリコーの作品によって、絵画は歴史画の変容を通じて政治空間の基本的イメージを提供するようになる。

そしてこの頃、美術館の登場によって絵画は基本的に展覧会すなわちエクスポジションで一般公衆に見られるものになり、現代まで続く芸術の制度的枠組みができる。その一方で、写真技術の発明によって、絵画の表象としてのあり方は変容してゆき、描かれる外部の实在は口実と化していわゆる「絵画の自立」が始まるが、それは「脱・表象化」とも言える過程の端緒でもある。

ここで「近代における表象」の問題がハイデガーの論文「世界観の時代」を素材に検討され、また、写真が登場して以来の芸術の大衆化の問題がベンヤミンの「複製技術時代の芸術」を参照しながら検討される。さらに、カール・シュミットによるホッブスの『リヴァイヤサン』研究を引いて、政治空間とイメージとの関係が美的政治と政治的美学との交錯として論じられる。

そして最後に、現代芸術の分水嶺としていわゆる強制収容所体験が芸術にもたらした効果が検討される。とりわけ 1990 年代から議論されたアウシュヴィッツにおける「表象の不可能性」の問いと、それに対するディディ＝ユベルマンの応答『イメージ、それでもなお』の議論によって、芸術の質に大きな転換がもたらされたことを論じる。さらに、強制収容所を生き延びた哲学者の E・レヴィナスや、戦争をみずからの内的体験と重ね合わせた G・バタイユの視点を引きながら、彼らの言う「世界の崩壊」のなかで、芸術がどのようなものとして捉えられていたのかが検討し、この時期に絵画のあり方が「表象」から何

かの「露呈」へと大きく転換したことが示される。

第2章では、まず現代絵画に見られる「顔の集合的呈示」の特徴をとりあげ、それが現代共同体論の展開と呼応するものであることを示してゆく。ハイデガーは共同体論を初めて存在論的次元に深めて、現存在の基本的在り方としての「共同存在」を論じたが、それを結局は民族の共同性に帰着させ、ナチズムに親和してしまった。それ以降、共同体論は反動的になりかねないとして遠ざけられてきたが、近代性再検討の文脈で、80年代に入ってフランスのJ・L・ナンシーが、人間の共同性とは、個を包摂する全体としてあるのではなく、個の成立以前の存在の複数性にこそ根拠をもつものだと論じ、ナショナリズムの隘路を切り開く新たな共同体論を展開した。それは、有限な存在がその有限性を他者と分有することによって個別化するという関係であり、個の統合ではなくむしろその成立の契機に「共に在る」の共同性を見いだす。とりわけ、死をみとる場面で、死にゆく者と生の側に押し退けられる者との、相互の脱主体化のなかで死の絶対的分離が「分かち合われる」ことで完了するという事態に、存在の有限性の「露呈 (エクスポジション)」を見るのがその眼目である。

このナンシーの共同体論は90年代に入るとイタリアのG・アガンベンによって変奏される。人間はアクチュアライズされない「潜在性」をもつがゆえに人間たりうると考えるアガンベンは、アウシュヴィッツの囚人たち、そして現代世界に広がる難民たちに、「剥き出しの生」という共通のあり方を認め、それを現代の政治的思考が踏まえるべき最も一般的な人間の共同性の地平だと主張した。彼は、同一性の要素となるあらゆる属性の手前で「誰でもいい誰か」というあり方に、無条件で承認される存在の「単独性」を認めるが、それはナンシーの言う「分有で成り立つ複数で単独の存在」に対応している。

そして2000年代に入ると、同じくイタリアのR・エスポジトが、フーコーによって提示された現代の生政治の問題系を背景に、西洋的思考における「コムニタス (共同体)」と「イムニタス (免疫作用)」の繋がりについて論じ、誕生と死における人間の未完結、それゆえに生じる「生」の贈与と負債という関係こそ個別的存在 (主体) の条件であり、その時点でいかなる帰属にも先立って人はすでに共同的であるということを示した。ただしそれは、ナンシーやアガンベンの場合と同じく、主体の権能に伴う「可能性」の外にあるという意味でつねに「不可能な」共同性である。

これらの共同体論は「脱-主体化」の位相に人間の根源的な共同性を見出すものだが、そこではもはや確かな「表象」作用は不可能であり、人びとはそこで、未完了の生存や世界の物質性に身をさらし、同時にみずからをさらけ出すしかない。それが「エクスポジション」の契機を決定的なものにする。そこに現代芸術が「表象からエクスポジション」へとその表現の基本的機制を転換させる根拠がある。

そのような共同体論のあとづけを受けて、現代芸術に見られる「顔の無関係な並列」がどのようにして共同性の露呈となっているのかを、写真のイメージから美学のカノンを作り変えたディディ＝ユベルマンの論を参照しながら示してゆく。さらにまた、死の影や特異なまなざしといった特徴に、共同体論との照応をみてゆき、最後に絵画における「エクスポジション」という概念がもつ複合性を洗い直して、今では芸術作品がただ美術館や展覧会に「エクスポゼ」されるだけでなく、作品そのものが関係や現象やそれを作っている

物質を、時間や環界に「エクスポゼ」し、そのことによって作品に立ち会う人びとを同時に「エクスポジション」の共同性にさらしているのだということを論じる。

第3章では、クリスチャン・ボルタンスキー、ゲルハルト・リヒター、アンゼラム・キーファーという現代芸術を代表する三人の作家たちの作品をつぶさに検討しながら、彼らの「脱・表象的」な諸作品がどのような形で「共同性のエクスポジション」に呼応するものであるかを示してゆく。

ボルタンスキーが素材として用いる記憶の遺物や、不在者の痕跡や、その代替物や記号の類の執拗な集積は「不在の共同性」を喚起するが、何よりアガンベンの「どれでもよいどれか」の集合こそが、「潜在性としての共同体」であるという思考を、作品を作る営みによってみごとに例示したものであると言える。

また、リヒターのフォト・ペインティング、グレー・ペインティングには、表象的イメージの消去への意志と、潜在性としての色彩等々の「エクスポジション」を見ることが出来る。そして9・11をモチーフにした『セプテンバー』のような作品を、19世紀の民衆の時代の「歴史画」に比して、現代のグローバル化した人間の共同性の条件にふさわしい「歴史画」とみなしうることを示す。

さらに、キーファーこそ、ナチスの過去を背負った戦後ドイツという、担うに重くみずからの帰属を託すこともできない「不可能な共同体」を、不可能なままに担ってその関係を形象化し造形する作家だともいえる。そこでは絵画と共同体との関係が、そのまま創作活動のモチーフとして真正面から引き受けられている。

その三人の主要な諸作品をそれぞれ、第1章、第2章で取り上げたいくつものテーマ(死との関係、イメージの不在、まなざしの交差、分有、エクスポジション、等々)に照らしてたんねんに読み解きながら、これらの作家が、非・表象的な絵画制作を通して、現代共同体論の開いた存在の関係性の地平を絵画的に実践していることをさまざまな局面から明らかにした。

【論文の評価】

芸術は元来共同性を基盤に成立するが、それがあまりに自明であるために問われることがない。ところが現代哲学における共同体論は、自明の共同性の根拠を掘り下げ、あらゆる主体形成に先立って存在論的にまず人が「共に在る」ことを示した。著者は現代アートの展開とそれがもたらす現代の美的体験に、この共同性のあり方が関わっているのではないかと考え、現代の美的体験(芸術鑑賞)の質的理解にこの共同性理解を持ちこもうとした。その結果、アウシュヴィッツ以後と言ってもよい変容を示した現代芸術の作品の基本的あり方と、やはりアウシュヴィッツを転機として更新された共同性に関する哲学的思考とが、相互に照らし合うだけでなく、現代の美的体験そのものをある共同性の体験として受けとめさせる事情を示すことに成功している。

著者の着想と試みはこれまでの共同体論や、それを美学に導入したディディ＝ユベルマンらの仕事に多く負っていると言えるが、それを正面からテーマ化して哲学と美学の共通領域としてまとめた意義は大きく、今後の共同体論や表象芸術論にもたらす刺激が少なくないと思われる。

口頭試験では、審査委員全員から本論文の意義について高い評価が述べられたが、いくつかの問題点も指摘された。主な点は以下の通りである。

- ・複数の委員から絵画における「エクスポジション」の多義性に関する疑問が出され、19世紀におけるこの概念の社会的広がりに関する指摘もなされた。また「表象」と「エクスポジション（露呈）」とのあり方についてもいくつか疑問が出された。それは「エクスポジション」概念の重層性、とりわけ美学におけるそれと存在論的な局面との分節化に不十分な点があったためだと思われる。

- ・第1章前半部は、表象の変容を時間的に長く扱っているため、統一性が見にくく、記述に工夫の余地がある。

- ・絵画の「脱一表象化」の決定機になる「強制収容所」の出現等の、きわめて強度の政治的出来事を扱うのに、「政治」の捉え方が希薄なのではないか、という指摘もあった。その点、イメージと共同性そして政治との分節を、芸術に即してさらに明確化する必要がある。

- ・現代共同体論の議論が扱いにくいため、芸術の実作に即してそのテーマにふれるところでは、ややもすると「死」や「共同性」の語り方が平板になるきらいもある。

- ・その他、ナチズムの作用のネガティブな様相とボルタンスキーの作品とのある照応をどう整理するのかという質問や、非一表象的絵画として「受難のキリスト」の系譜もあるが、それとの関係を考える余地はないか、といった質問もあった。

ただ、これまでにふれられなかった美点として、第3章の作家たちの実作の記述が行き届いており、従来の見解を踏まえたうえで踏み込んだ解釈を呈示している、という指摘、さらにまた、現代共同体論の展開を明確に分節化して示したのはおそらく初めての功績だろうという指摘もあった。

上記の疑問、指摘等はそれ自体、今後の展開も期待される申請者の研究の広がりや深みを示すものでもあり、また申請者はこれらの疑問・指摘に対し、誠実かつ的確に回答し、審査委員を納得させた。結果として、主題の独創性、テキストの丹念な読解、先行関連研究の参照とそれへの的確な批判、そして現代芸術の実作のやはり丹念な読解の成果として、論文全体は冒頭に記したように好意をもって高く評価された。

【結論】

以上のことから、論文の内容と最終試験の結果をふまえ、冒頭に述べたとおり、審査委員会は全員一致で、本論文をもって学位申請者遊佐香子氏に学術博士の学位を授与することが適切であるという結論に達した。